

巻頭言

近年、質的研究法の深化にともない、病者の生（「ライフ」）をどのように捉えるかという問いや、実際の研究手続き上において捨象し得ない研究者—調査協力者の関係といかに向き合うか、という問題が提出されている。人（あるいは場）と深く関わりながら現象の理解を試みる質的研究において、こうした問題は「内省性」（reflexivity）の議論として言及されるが、研究者が実際の研究の現場・文脈のなかで、どのように調査協力者との関係を構築したり、関係の変化を感じ取っているか、といった情報は十分に共有されていないのが現状である。

本誌『厚生心理学と質的研究法—当事者（性）と向き合う心理学を目指して』（共同対人援助モデル研究・第2号）は、こうした問題意識に関連し、若手院生の手によって企画された2件の学会シンポジウム（於：日本質的心理学会第7回大会）における議論を講演録形式に準拠し整理したものである。内容を以下に詳述する。

シンポジウム「難病患者の生をどのように伝えるか？—「ライフ」の記述をめぐる方法論の可能性」（企画：日高友郎）においては、進行性の神経難病である筋萎縮性側索硬化症（ALS）に関わる研究者および患者本人・家族を話題提供者として設定し、「当事者」としての視点や、ローカルな現場で培われてきた知見を捨象することなく記述するための方法論について議論を行った。話題提供者とその内容は以下のとおりである：在宅療養中のALS患者宅への3年にわたるフィールドワークを通じた、場でのコミュニケーション支援の技法の厚い記述（日高友郎）；映像を用いることで多声的なエスノグラフィの実現を目指す「ビジュアル・エスノグラフィ」の先進的試み（安達俊祐）；当初は看護師としてALS患者支援にあたっていたが自身がALS患者となったことで見えてきた「当事者」としての語り（牛久保結紀）；患者家族としての経験を伝えることと社会的支援システム構築の重要性（安田智美）。また、指定討論者には臨床心理学を専門とする研究者（児島達美）を

迎え、病い・障害を扱う心理学のアプローチにどのような可能性があるか議論を行った。なお、当シンポジウムにおいて示唆された論点を整理することを狙いとし、コメント形式の論考を付加している（赤阪麻由）。

シンポジウム「インタビューにおける相互行為を探る：役割の変化が立ち現われる瞬間に注目して」（企画：滑田明暢）では、インタビューの現場における調査者と協力者とのやりとりを微視的な視点でもって記述する試みが示され、議論が行われた。話題提供では、「評価者としての立場を持ちながら取り組む難病患者を対象としたQOL調査」（福田茉莉）、「既婚者ではない調査者が長く家庭生活を営んできたご夫婦に家族内での役割分担を尋ねる調査」（滑田明暢）、「女性の視点から質問が行われる男性の化粧行動の調査」（木戸彩恵）のそれぞれの文脈における調査者と協力者のやりとりが紹介された。指定討論者にはインタビュー研究における専門家（安田裕子）、実践的フィールドワークの専門家（中坪史典）を迎え、調査者と協力者におけるズレが示しているものとその可能性の論点について議論が深められた。調査者と協力者が持ち込んでいる文脈がどのような対話をもたらすのか、という視点からコメントも受けている（若林宏輔）。

生（「ライフ」）の記述や、個人的生活に深く入り込んだ研究を遂行する上では、当事者の生活世界や場の文脈との関わりは避けられない。本誌で紹介する学会報告は、どれもその当事者性との関わりと向き合ってきた実践である。当事者と向き合ってきた問題や課題については、いまだ学術的な方法論の議論が行われている最中であり、その問題の解決策を示すためには多くの現象を集め、検証を続けていくことしかないであろう。本誌において紹介する実践の報告がさらに議論を深め、問題の解明へと導くことを願う。

（日高友郎・滑田明暢・サトウタツヤ）